

2 「満蒙開拓団」の実態

- (1)「渡満」と「暮らし」
- (2)「二つ」の立場

※満州で生まれ死んだ3人

三女・愛子(昭和18年 1歳3か月)

四女・春子(昭和20年9月 1歳9か月)

次男・征夫(昭和20年12月 32日)

満州の凍土に眠る

(1) わが家の渡満と

敗戦までの
満州での暮らし

昭和15年12月～20年8月15日

渡満時の須田の家族

- 父(鉄造)28歳
 - 母(ハマ子)26歳
 - 一彦(4歳) 昭和21年(五人帰国)
 - 茂子(2歳)
 - 洋子(9か月)
- 昭和十五年十二月
(現長岡市・小国町法坂)
前刈羽郡中里村法坂

昭和15年12月 渡満
(16年ア太平洋戦争)



七転

八起

手記から一文

村に召集令状
一家を守るため渡満決意

手記『航跡を追って』より

(村上市 吉浦出身 大正元年)

須田(三浦)鉄造

部落総代激励のことば

(法坂部落・満洲移民なし 総代山崎金作さん)
(昭和15年12月 鎮守様で壮行会)

「日支の間に戦雲益々漂うこの時、
自ら進んで大陸に進出しようとする
勇気と壮図に感激するものであります。

須田家の限りない発展とご多幸を
心から祈ってお送り致します」

「戦雲益々漂うこの時」

満洲事変から太平洋戦争まで

・昭和6/満州事変 7年/満洲国建国

・昭和12 日中戦争(泥沼化)
「100万戸・500万人移民計画」

・昭和15年 大政翼賛会 紀元2600年 - 須田渡満

・昭和16/12/08真珠湾攻撃-ア・太平洋戦争

※ 在満国民学校

・S15年12月

小城在満国民学校(吉林省盤石県小城)
(しょうじょう) ※ 学校がない! (岐阜県送出開拓団)

・S18年5月

興隆川在満国民学校(吉林省盤石県興隆川)
(こうりゅうせん) (東京都送出開拓団 奥多摩小河内村)
※ 医者がない (昭和15年3月～16年3月入植)

興隆川開拓団

奥多摩ダム建設

東京奥多摩郡 小河内村
「満州に小河内村をつくろう」

戦前の旧小河内村



《城壁に囲まれた開拓団集落》

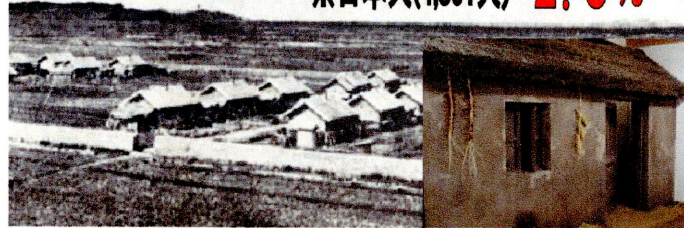
《治安不良》・最初に銃を渡されて 一城壁とトロッキー

◆磐石県

(19万5000人)

《3,960km》(埼玉県の広さ)

※日本人(4,851人) **2.5%**



158戸 648人

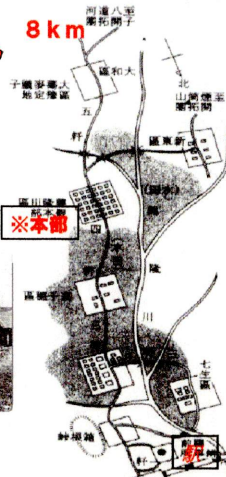
帰国 388名

死者 219名(34%)

《死亡 - 34%》



日本人(高級)住宅(2家族)



《開拓団の生活》 (こりゅうせん) 興隆川開拓団

「医療と教育」は劣悪!

産婆	村長代理	教員	学校長	医師	副組合長	副村長	村長	職名氏
小林みつあ	宮沢豊春	須田鉄造	藤原茂郎	黒崎光治	松浦信市	満人	加藤久人	名氏
キ	キ	キ	キ	キ	キ		キ	区分
	村長応召のため						兼組合長	摘要

◆興隆川開拓団職員
(原住民と混在)

「幸せ」だった日本人

- ・氷点下35度 ・オンドルとペチカ ・トイレの山崩し
- ・一日中スケート キジ捕り 砂糖もいっぱい
- ・王さんとの満州馬で草原を走る (満語)
- ・満州豚 産み落とした卵集め
- ・抗日武装勢力(匪賊)闘争=関東軍に対し
- ・匪賊数(S7年)21万人 (S8年)6万人に減
- =中国人の不幸 ※徹底した「討匪作戦」



・須田一家の家族写真(昭和十八年)

「幸せな日本人」(開拓団)一野花の中での行楽 “日本人会”



満洲の地で特別な地位を持った日本人

開拓団の集合写真

中国人への蔑視感(恐怖)男/戦闘帽
(背後に迫る影)



昭和20年/「七有八無」
中国人学校では「日本語教育は不要」

「幸せ」だったが心の底から笑えなかった(一彦)
ランブ生活、新聞を読む父の顔

地平線まで続く-トウモロコシ畑

ひまわり、大豆、高粱、小麦、スズラン



「ひとつね一里」